
ラララーと話しかけてくる。

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラララーと話しかけてくる。

【Nコード】

N1846A

【作者名】

一柳 紘哉

【あらすじ】

僕の少々奇妙な話。でも今思えば彼に会わなかったらこんな面白いことずかなかった。

弾けるドロドロのポップス。

重くのしかかる重低音に、喉の奥から鼻を通り胃が飛び出そうになる。

ロックなのかよく分からない音を奏でながらボーカルは気持ちよさそうに歌っている。

っ痛い。

歌の歌詞を叫びながら女の子が僕の足を踏みつけた。僕の目にはここに集まっている人達が狂人にしか見えない。

何でこんなところに僕はいるんだろう。

アンコールも終わり、店内の照明が明るくなって、やっとみんなが冷静になっていく。

人ごみを掻き分けてカウンターに向かい、ドリンクチケットをバイトに渡してビールを頼んだ。

笑顔で渡されたビールは僕が飲んできたビールのどれよりも不味くて、こんなものを飲むぐらいなら海水でも飲んでいるほうがましに思えた。

「どうだった？結構よかったろ。」

いま俺が一番注目してるバンドなんだ。」

興奮が収まらないのか、鼻をひくつかせ、汗まみれの友人が僕にしゃべりかけてきた。

僕は少し考えて、別に彼が好きなものを批判する必要もないので、良かったよとだけ答えた。

彼は僕の言葉を必要以上に好意的にとり、今度のライブの日時を僕

に説明してくる。

上の空で適当にああとかうんとか言って、まるで豚みたいだなと考えていたら、今度のライブも一緒に行くことになってしまった。ライブハウスを出て飲みに行こうと誘う彼に鬱陶しさを感じた僕は、用があるからとだけ言って逃げるように外に出た。

夜風が気持ちいい。ネオンの光のせいで夜だとゆうのにこの辺りは関係がなくないつも明るい。

最悪だった音の洪水がゆっくり足の裏からアスファルトに流れ出ていく。

幾分か気分がよくなった僕は、足取りを早くして家へと急ぐ。

さっき飲んだビールが口の中を支配している気がしてならない。

気分は良くなってきたのに気持ちが悪くまだ悪い。辺りを見回して自販機を探すが見あたらない。

しかし、自販機の変わりに道路の向かい側にコンビニが見えた。

僕はガードレールを乗り越えて車道に出た。左から車が二台向かってきている。

ガードレールにもたれながら通り過ぎるのを待つて、走って車道を渡りガードレールを乗り越えてコンビニの店内に入る。

「いらっしゃいませ」

新人なのだろう、明るく、さわやかな声で挨拶をしてきた。

店内を見渡すと僕の他に三人ほど客がいる。

疲れたサラリーマン。小さな子供。スウェット姿の女の子。

コンビニというのは客の視線から見れば実に様々な人が集まっている見ていて飽きない。

雑誌を興味なさそうに見ているサラリーマンの後ろを通って、飲料水が並んだ冷蔵庫に向かう。

サイダーと少し迷ったが100%オレンジジュースを冷蔵庫から取り出してレジに向かう。

「いらっしゃいませ」

「あと煙草をください。一番上の棚の右から二番目のやつ」

「二百七十円になります」

僕は財布から二百七十円を取り出してバイトに渡す。お札を入れるところにレシートがたまっている。外のゴミ箱に捨てていこう。

「ありがとうございます」

煙草とオレンジジュースを持って歩き出そうとしたら止められた。

「待ってください。オレンジジュースは会計してません」

確かに煙草の値段しか渡していない。

オレンジジュースをレジに置きいくらと尋ねる。

「百四十七円です。」

でも買わないほうがいいですよ、店長が紅茶入れて待ってますから。

「

バイトの子がそう言うのと、一瞬店内が真っ暗になった。

すぐに明るさを取り戻した店内。だが、さっきまでと何かが違う何か異常がある。

そう思い周りを見渡すと客の姿が消えていた。

サラリーマンがいた場所には彼が読んでいた雑誌が落ちている。小

さな子どもがいた所には変化がなかったが、女の子がいたところにはかごが落ちていた。その周りにコンビニで買える化粧品やお菓子それに2&#2467;の水が散乱していた。

「後ろのバックヤード…

ああ分らないですよね倉庫の事です。その奥に裏口があるのでそちらに行ってください。」

バイトはこの状況が起こるのをあらかじめ知っていたのか、平然としている。そして不気味なほどにつこり微笑んで喋った。

僕は痛み、そして熱くなりだす頭を無視して、できうる限り冷静に尋ねる。

「さっきまでここにいた人達はどこにいったんです？」

電気が消えた時間はとても短かったから店内を出たとは思えないんですけど」

バイトはにつこり微笑んで。

「消えました。それ以外は分かりません。

だってそうでしょ、僕はただのバイトですから。それに誰か知り合いいでもいたんですか？」

全員知らない人だったでしょ？」

…ほうらやっぱり。だったらその人達がどうなろうと関係ないじゃないですか。」

何をしゃべっているんだこいつは。

消えました？」

分かりませんか？」

僕のほうがこの状況が分からない。

「早く奥に行ってください。
あ、それと外に出ようとしても無駄ですよ。その自動ドアはもう開きませんから」

自動ドアの前まで行くと、こいつが言うとうり反応しなかった。拳に信じられないほどの力を込めてドアを殴るが僕の拳の皮が破れドアには皮脂しかつかない。

レジの脇に、かごが積み上げられている。

そのすべてを蹴って、かごを積み上げた後も移動に便利に作られている金属の滑車を振り上げて、世界が終わりそうなほど何度も叩くが傷一つつかない。

もう一度店内を見渡す。

雑誌が落ちている。

かごが落ちている。

その周りにコンビニで買える化粧品やお菓子それに2 & a m p ; # 8 4 6 7 ; の水が散乱している。

それらを見たとき文字どうり、バイトの言葉どうり、消えた、のだと確信した。

「もういいでしょう。諦めてください。」

肩で息をしながらバイトの言葉が頭の中でクルクル回る。

行つてやる。

店長に会つてやる。

それしか先に進めないのだろ。

散らばったかごをもう一度蹴り大股で店内を奥へと進む。

冷蔵庫の隣にある扉を足でぶち壊し、倉庫に入り右を見るとまた扉が見えた。

「この扉の奥に行けばいいんだな。」

怒鳴りながらレジを振り返るとバイトも消えていた。

そこにいるはずの者が消えたレジは虫がいない虫かこのようだ。

頭が急に冷えてくる。さっきまでの熱さがなくなり、代わりに不安が押し寄せる。

壁に手をやり、崖の上を歩くように一歩ずつ踏みしめながら扉に向かう。

ドアノブに手をやり、深呼吸をする。

まるで高校の推薦のときや人生を決める面接に向かう気持ちに似ている。

そんなことを思いながら勢いよく扉を開く。

「いやー待ってましたよー

さーこつちにきてー座ってください。」

別にこれといって特徴が見当たらないスーツ姿の三十ぐらいの男がテーブル下から声をかけてきた。この人が店長なのか。

何でそんな場所にいるんだろう。

「テーブルの足がーぐらついてーしょうがないんーですよ」

喋り方には特徴があるな。

語間を伸ばしてしゃべるくせに最後の言葉だけ言い切る。正直聞いていて気持ちが悪い。

周りを見る。中は八畳ぐらいの広さのプレハブで作られた小屋の中にいるような作りで、部屋の真ん中にテーブルがありその上にマグカップが乗っている。たぶん中身は紅茶だろう。あとはパイプ椅子が二脚あるだけである。

男はテーブルの右足の下に厚い布を敷き、これでよしと言い奥の椅子に座った。

「さー座ってーください」
言われるがまま椅子に座る。

「よくー来てーくれました
こんばんわー私ーがこのー店長です
早速ですがー後ろをー見てください」

「そんなことよりあなたに聞きたいことが山ほどあるんです」

「後ろを見てください」

後ろを見たい。

もうその欲求しか沸いてこない。
体と首を捻り後ろを振り向く。

写真が宙に浮いている。

よく見ると写真の上の両隅から細い糸で天井からぶら下がっている
だけだった。

写真には今日ライブを一緒に見た僕の友人が写っていた。
鼻を開き、汗まみれでまるで豚みたいな友人の写真だった。

「よくー撮れてるーでしょう」

こうゆうのー撮るのがー私のー趣味です。

これわーさっきーあなたをー最悪な気分ーにさせたー彼のー写真の
はずです

あんなー音楽にー興奮ーしてるー彼のー写真です。」

間違いない。

これはライブが終わって僕に話しかけてきたときの彼だ。

…どうゆうことだ。

不可能だこの写真を撮るのわ。

あの時間違いなくカメラを持った人なんていなかった。それに入場するときにカメラは誰もが一時預かりになっていたはずだ。それに、この写真は僕の目線で撮られている。混乱する頭がプスプスと音を立てていくようだ。

「あなたのー目をー借りさせてーいただきました。
そのーお礼とーお願いーがあつてーここにー呼んだのです。
聞いてもらえますか？」

：残念だけど彼のお願いを教えることはできない。

彼の話の後、店内に戻るとバイトはあくびをしながらレジにもたれていた。知らない客が五人いた。

消えた客がどうなったか知らない。

消えたままなのか、会計を済ませて家に帰ったのだろうか正直どちらでもよかった。

家に帰り風呂に入る。テレビを見て布団に入った。

ただ僕は布団に入って夢のような夢を見るまで笑いが止まらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846a/>

ラララーと話しかけてくる。

2010年11月18日03時04分発行